

【氏名】 粕淵さやか

【所属大学院】（助成決定時）津田塾大学大学院

【研究題目】

戦間期の日米関係 ―滞日アメリカ人ジャーナリストの対日観と役割―

【研究の目的】

日米関係研究の今後の展望として、米国側から見た日米関係や、米国世論の対日観への理解を深めていくことが期待される。そのためには、日米関係研究を政府対政府の関係として捉える従来のアプローチでは不十分であり、民間レベルや個人が国家間関係にどのような役割を果たし、影響を与えうるのかを検討していくことが不可欠である。戦前の日米外交関係に関する研究では、アメリカ世論の抱く日本像、アメリカのメディアが伝える日本報道を体系的に探るものは少ない。こうしたことに注目し、本研究は、アメリカ世論と政策決定者の対日観形成に一定の役割を有したであろうジャーナリストたちを考察する。日本に滞在したジャーナリストたちの実態を明らかにし、彼らが日本をどのように捉え、どのように伝えていたか、そして彼らの行った草の根レベルの日米交流について調査したい。

【研究の内容・方法】

戦間期に、日本に滞在したアメリカ人通信員達はどのように日本の情報を入手し、どの程度自由に本国への情報提供活動を行っていたのか。滞日したアメリカ人ジャーナリストはどのような人達で、彼らの日米関係に関する見解はいかなるものだったのか。そして、アメリカの政策決定者や世論が日本の状況を理解するための情報源として、彼らは重要な役割を担っていたわけだが、そうした責任と機能をどの程度果たせていたのか。それはつまり、彼らが日米の外交上文脈を知らないために起こりうる曲解や誤解を避けるに足る、日本社会と日本人に対する一定の理解を有し、客観的な視座を有していたのか、という問を明らかにすることにもつながる。

戦間期に日本を訪れた外国人ジャーナリストは数多く存在したが、その多くは短期滞在者で、日本語や日本文化を理解する者、日本に長期滞在した者は極めて少なかった。本研究は、日本に長期滞在したジャーナリスト、特にフライシャー父子に注目した。調査方法は、米国ワイオミング大学に所蔵されているフライシャーコレクションを中心に、彼らの軌跡をたどった。また、フライシャー父子が滞日中交流を持った他のジャーナリストの資料や、当時の新聞、そして、米国ハーバード大学所蔵の駐日米国大使ジョセフ・グルーの日記資料等を調査した。

【結論・考察】

父 B. W. フライシャーは 1907 年から 1940 年までの 30 余年間を日本で過ごし、主要な英字新聞 *Japan Advertiser* の社長として、日本における外国語新聞の発展に大きく寄与したほか、日米協会を設立し、極東の情報雑誌を創刊するなど、日米親善に尽力した。息子のウィルフレッド・フライシャーも、1929 年から 1940 年まで日本に滞在し、*Japan Advertiser* の編集長を務めながら、アメリカの新聞、主に *New York Times* の通信員として活躍した。フライシャー父子は日本語こそ理解しなかったものの、長期にわたって日本に滞在するなかで、多くの日本人有力者と交流をもち、日本人スタッフと共に新聞を経営するなど、積極的な日米交流を行った。彼らは、日本での新聞発行と、米国新聞社の通信員として活躍することで、日米双方の読者へのオピニオンメーカーとして、重要な役割を担った。しかし、1930 年代後半以降は、日本政府による情報統制や、滞日外国人への監視が強化され、ジャーナリストとしての活動は乏しいものとなっていった。また、彼らは草の根レベルの日米交流を推進したが、彼らの交流した日本人は、英語の話せるいわゆる上流層の日本人が中心であり、日本社会に深く根を下ろした生活をしていただけではなかった。ウィルフレッドの捉えた日本は公正なもので、通信員としての役割は評価できるが、日本人や日本社会に対する理解には限界があったと思われる。